

出会い(26)

心の深淵

奥村 一郎



一心と無心

仕事などに夢中になり、また専念することを「一心」とか、「無心」と言う。どちらも同じ意味の言葉のようだが、「一心」よりも「無心」と言うほうが、なんとなくいい。「一心」と言えば、「いちずに」とか、「ひたぶるに」とか、一つの目標に向かって、わき目もふらず突っ走っていくようだ。目標と私自身に歴然とした距離がある。わき目もふらずに力いっぱい前進する姿が、厳しく感じられる。「一心に」は、つまり「一心不乱に」とも言う。道草をしたり、気を散らしたりして、心を乱さないことである。立派だが、感心して見ているだけになる。ついていけない感じ。

それに対し、「無心に」というのは、今していることに吸い込まれて、自分自身がなくなってしまうこと、言い換えれば、していることが私と一体になって溶け合った状態である。そこでは、目標を目標として走っているのではない。すでに目標のところにいて、その足元を深く掘り下けている姿。「一心」のような緊迫感がない。むしろ広く、豊かな充実感がある。だから、「無心不乱」というような言葉は、ありえない。わき目とか、気を散らす可能性自体が消失してしまうので、「不乱」という言葉はいらないからである。

「一心に」働く人は多いし、特に日本人について言われる「まじめ人間」の特色でもある。しかし、そこには落とし穴がある。人間が仕事の奴隷となって、仕事の「主」ではなくなってしまう。仕事がうまくいかないと、いらだち、疲れ、自分も他人も傷つけるようなことになりがちである。それに対して、仕事と自分が一体になる「無心」の状態においては、自分が「主」となる。そこには、仕事に対する執着や隷属の意識がない。自由である。禅語のなかの「随処に主となる」という言葉は、それを意味する。

しかし、キリスト教の場合、そこに、さらに神のみ旨ということが入ってくる。すなわち、神のみ旨と一体になるということである。神のみ旨を行うとは、この世の一切、何よりも自分自身から自由になることによって、神のみ業を果たすことである。「私の食べ物、私を遣わされた方のみ旨を行い、その業を成し遂げることである」(ヨハネ4:34)と言ったのは、キリスト・イエスであった。そこには、キリストの「無心の日々」があったと言える。

百花、春至りて

「百花、春至りて誰がために咲く」。『碧巖録』という禅書に出てくる言葉である。春ともなれば、百花咲きほころぶ季節、しかし、その花々は、「だれのために」という目的意識をもって咲こうとするのではない。ただ大自然の命のめぐりのままに、咲くべくして咲く。その無心の姿がまことに美しい、という意味である。美しくなろうとするのでもなければ、まして美しく見せようとするのでもない。自分の美しさを意識しない美しさ。それがまことに美しい。自然が美しいのは、そのためである。人間が美しくないとすれば、そのような「無」すらも意識しない「無我」の心境になれないからである。まして、美しく見られたい、美しく見せたい、という自己顕示欲は人間を醜くする。虚飾とか虚栄と言われるものである。

なぜ人間は、かくも醜いのか。外にも内にも、美しく見せようとする不自然さからである。いつか、イタリアの広々としたウンブリアの平原を下に見る静かな山道を一人歩いていたときのこと、ふと浮かんだ思いが、今なお記憶に鮮明に残っている。「自然はなぜ美しいか。命の流れに逆らわないからだ。人間はなぜ美しいか。命の流れに逆らおうとするからだ」。いくぶん、説明を要する言葉かと思うが、そのときの美しい自然が、そのように私に語りかけてくるように思えた。

本当にうつろい姿

それは ひとすじに流れたものだ

川のようなものだ

八木重吉

しょうじいちにょ
生死一如

死はなおさら、人間にとっては、あらいがたい暗黒の挑戦となる。生老病死、それが釈迦の悟りの導火線となったことは、よく知られている。老いも、死も、一つの自然の姿である。しかし、私たちはそれをいとい、それを避けようとする。死の受容を助ける「ホスピス」は、今なお多くの疑問を残す宗教的・倫理的課題とされている。安楽死の問題も、そのことと深いかわりをもつ。死刑の是非論でさえも。人間は「自然」に生き、「自然」に死ぬことができない。この不自然さは、いったい何を意味するのであろうか。いづれにしても不自然さは、

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリックのカルメル修道会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンツ宗教研究所）など多数。

確かに美しくない。ことに、日本人はそれを嫌う。「災難に逢^{あう}時節には災難に逢^{あう}がよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがる妙法にて候」という良寛の悟境は、「日々是好日」の禅心を表す。道元は、さらに仏教学的根拠をもって説明する。

この生死は、すなわち仏の御いのちなり。これをいといすてんとすれば、すなわち仏の御いのちをうしなわんとするなり。これにとどまりて、生死に著^{しやく}すれば、これも仏の御いのちをうしなうなり。いとうことなく、したうことなき、このときはじめて、仏のころにいる。（『正法眼蔵』生死）

「自然^{じねん}」とは、仏教的に言えば「法爾^{ほうに}」である。「法」とは「仏法」である。「爾」は「しかり（然）」とも読む。「自然法爾」という仏教用語をキリスト教的に解すれば、「神法」または「永遠法」にも近い。

八木重吉の次の詩もまた、それを表している。

くるしいことにはいきつたら

くるしさはなく ただ 生くるといふことばかりだった

女子パウロ会『断想』（P.66）より一部転載

P.G.I.のお知らせ

フォト・ギャラリー・インターナショナルでは、8月の2カ月にわたり4人の作品展を下記の日程で開催いたします。P.G.I. 10 Days Exhibitionと題するこのシリーズでは、これまでと異なる選考基準で、若手や新人、中堅作家、あるいはポートフォリオ作品を短期間に紹介する企画展です。本展はその皮切りとして、4人の中堅作家を取り上げ、テーマのみならず表現方法や展示方法など個性的な作品を発表するものです。

■ 片桐飛鳥作品展 " kuon+ / クオンプラス "
7月1日（火）－12日（土） 7.12（土）のみ営業時間11:00－18:00

■ 小島公子作品展 " The BROOKLYN RAIL "
7月16日（水）－30日（水） 7.26（土）のみ営業時間11:00－18:00

■ 大脇 崇作品展 " 500 stories "－小さなstreet劇場
8月5日（火）－16日（土） 8.16（土）のみ営業時間11:00－18:00

■ 中根静男作品展 " Subthought / サブソート "
8月19日（火）－30日（土） 8.30（土）のみ営業時間11:00－18:00

＊本展会期に限り最終土曜日のみ
11:00－18:00まで営業致します。

■ 石元泰博 写真展 「桂離宮」
Yasuhiro Ishimoto " Katsura Villa "
9月3日（水）－26日（金）

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩 10 分

【営業日】 月－金 11:00－19:00 【入場無料】

【休館日】 土・日・祝日

＊P.G.I. についての詳しい情報はホームページ (<http://www.pgi.ac>) をご覧下さい。

表紙の言葉



写真：フランコ・メソッ
ペシャワール、パキスタン 2001年

ランディ・コタールのシシカバパー・レストラン
にて
2001年4月

「…ペシャワールの大市場には、中世風の東洋の市場に期待されるものがすべてそろっている。細い道や路地や掛け小屋が迷路をつくり、ペシャワールから通じるとの道の両側にも同じような小さな店がぎっしりと並ぶ。泥か、泥と切りわらをまぜてつくった店だ。屋根は多種多様で、アシもあれば、古い木の枝や黄色いトウモロコシ色の植物を重ねただけのもの、それをアシや柱のたるきに積み上げた屋根もある。なかには、うす色の砂利まじりの土を盛った屋根もあって、そこから雑草や草のびている。掛け小屋では果物や野菜や肉や、ありとあらゆる製品を売っている。…」
『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング
（晶文社刊）より

＊ランディコタール：カブールへの途上にある、部族自治区の心臓部に位置するアフガニスタン国境から20 kmほどの小さな町